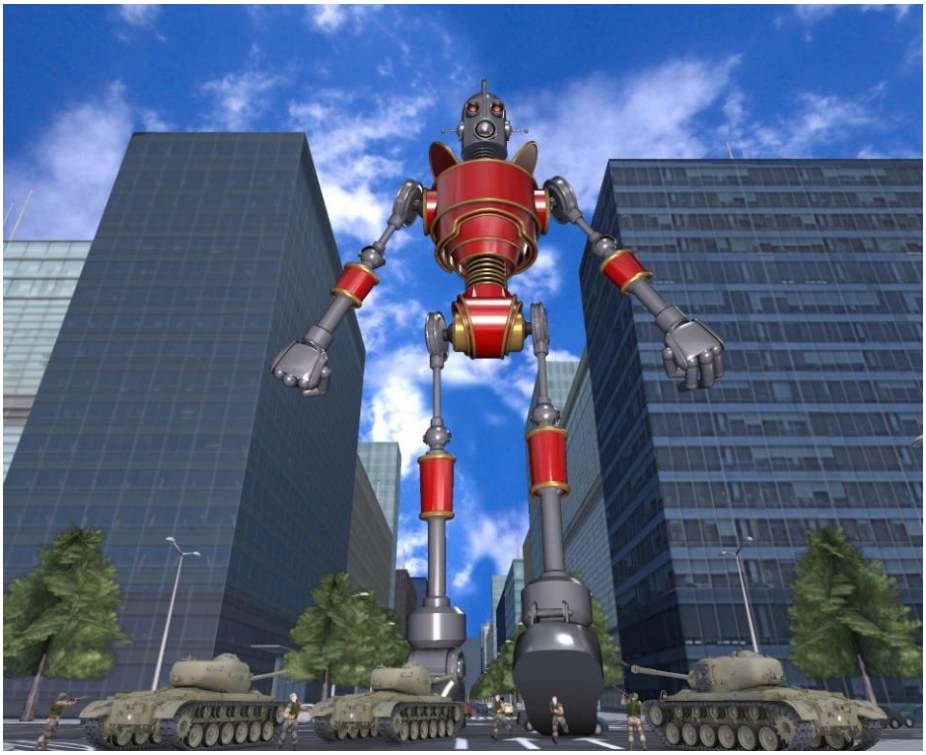
このお話は「ノモイの頸木 1〜4」のアフターストーリーです
あらかじめ読んでおかれた方が理解しやすいとは思いますが、これだけを単独で読んでもそれなりにお楽しみいただけるようにはなっております
特に警告はしておりませんが、当たり前のように R18 です

ノモイの逆襲
By JUNKMAN

巨大な異星人少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJK の侵略によって存亡の瀬戸際に立たされてから 3 か月、地球は再び新たな危機に直面していた
正体不明の謎の戦闘ロボットが襲来してきたのだ
戦闘ロボットは体高約 60 メートル
20 階建ての建物の高さくらいある
推定重量は約 3000 トン
そんな巨大な超合金の塊があろうことか自在に空を飛び、ところ構わず破壊活動を行うのだから始末に負えない
連絡を受けて出動した地球防衛軍の兵士たちは、市民を守るため、勇敢にも絶望的な戦いに臨んでいた
現場の部隊長は大声を張り上げて兵士たちを鼓舞する
「撃て撃て撃て！」
「了解！」
「撃て撃て撃て！」
「・・・ぜ、全然効いてませんよ」
「泣き言をいうな！撃て撃て撃て！ともかくなんとか奴らを足止めするんだ！」
「無理です無理です」
「やるしかない！」
「ああ、部隊長、危ない！」
「ん？」
部隊長が振り返ると、謎の戦闘ロボットがすぐ目の前まで迫っていた
「うわ」
ようやく気づいた部隊長に向かって、謎の巨大戦闘ロボットはいきなり足を振り上げる
3000 トンの重量で踏み潰してしまおうということだ
まずい
部隊長は慌てて退却しようとする
だが時、既に遅し
巨大戦闘ロボットは振り上げた足を思い切り振り下ろす
もうダメだ
部隊長は頭を抱え込んでその場にしゃがみ込む
部下の兵士たちも思わず顔を背けた
・・・
・・・
・・・
あれ？
いつまでたっても
ずしいいいいんと響くはずの足音が聞こえない
おそるおそる目を開けてみる
・・・



あれあれ？
巨大戦闘ロボットがいない
どこへ行った？
「あ、あそこだ！」
誰かが声をあげる
その指さす方をみてみんなが息をのんだ
巨大戦闘ロボットは背後の遙か上空にいた
頭部を巨大な指につままれて
巨大戦闘ロボットよりも、更に遙かに巨大な少女の指につままれて

＊＊＊＊＊

話は３時間ほど遡る
「・・・報告します！謎の巨大戦闘ロボットはネオ・トキオの街を一方的に蹂躙しています！地球防衛軍の攻撃は巨大戦闘ロボットに対して全く効果がなく、足止めすることもできません！」
「・・・」
「それだけではありません！更に同じ型の巨大戦闘ロボットが次々に現れました！」
「なに？」
「その数、約 1000 体」
「！！！」
一体だけでも地球防衛軍は全く歯が立たない巨大戦闘ロボットが、1000 体
これはもう逆立ちしても勝てるわけがない
地球はこのまま正体不明の侵略者の前に屈服するしかないのか
・・・
「・・・仕方がないね。救援を頼もう。」
地球連邦政府の事務総長は、執務机の傍らにあるホットラインの受話器を取り上げた

＊＊＊＊＊

「・・・もしもし、わしは地球連邦政府の事務総長じゃが」
「あーら事務総長さん、お久しぶりでございます」
「おうおう、久しいな。あんた、名前はなんといったかのう？」
「これは失礼いたしました。わたくし、スンゲデッカ星警察庁警視正のパープル・マルサ・サンチアゴ 27ωOL と申します」
モニターに現れた若いメガネのチャーミングな女性が、事務総長に向かって愛想よく微笑みかける
説明しよう
地球からは比較的近傍に位置する太陽系外惑星・スンゲデッカ星は、つい最近になって地球とファーストコンタクトを済ませたばかりである
その惑星の住人スンゲデッカ星人は、進んだ科学力に巨大で強靱な肉体、更に融通が利かないほど愚直な遵法精神を特徴とするヒューマノイドタイプの高度先進生命体である
その戦闘力は卓越しており、実際に地球はたった一人のスンゲデッカ星人犯罪者ユキ・シュライク・イッテラー18λJK によって易々と侵略されてしまった（詳細は『ノモイの頸木』を参照）
この危機は、最終的にはスンゲデッカ星警察の介入によって事なきを得たが、この一連の顛末はスンゲデッカ星人の戦闘力の高さを地球連邦政府にまざまざと見せつけることになったのである
災い転じて福となす

これを機に地球連邦政府はスンゲデッカ星警察との間にホットラインを設置した
モニター画面に現れたパープルと名のるメガネもチャーミングな若い女性は、犯罪者の身柄を確保するためにわざわざ地球までやって来てくれたスンゲデッカ星警察庁のミニスカ婦警さんである
顔見知りが相手なら話は早い
事務総長は単刀直入に要件を切り出した
「実はまた地球がピンチなのじゃよ」
「あらまあ」
「謎の巨大戦闘ロボットが来襲して地球を蹂躙しておる。その数なんと 1000 体じゃ。地球の防衛軍では全く歯が立たない」
「それはお気の毒に」
「そこでお願いがあるんじゃ。あんたたちスンゲデッカ星警察に、あの侵略者を退治してもらえないものかのう？」
パープル警視正は眼鏡をかけなおしながら冷静に応答した
「侵略者に対する反撃となりますと、地球防衛のお仕事ですね？」
「そういうことになるな」
「それではその仕事はお受けできません。わたくしたち警察の仕事は治安維持ですが、スンゲデッカ星の主権が及ばない領域で治安維持活動を行うことは明確な違法行為になります。」
「そ、そんな！」
「とは申されましても、わたくしたちは公務員ですから、決められた権限を超越する活動は一切認められないのです」
「うううう・・・では、防衛ということなら軍はどうかね？スンゲデッカ星防衛軍に援護を頼むことはできないものかな？」
「軍ならば防衛の任務に就くことは可能かと」
パープル警視正はにっこり笑いながら答えた
事務総長は小躍りしながらたたみかける
「そ、それは有り難い！では早速スンゲデッカ星防衛軍の担当者に繋いでくれないかね？」
「すぐに防衛軍というわけにはまいりません」
パープル警視正は首を横に振った
「地球とわがスンゲデッカ星の間には未だに安全保障条約が締結されておりません。その状態で軍を派遣するとなると法的根拠がありませんので侵略行為と見なされてしまいます。ですから、まず急いで安全保障条約を締結するところから始めることになります」
「ぐ、具体的にはどういう手続きになるのかね？」
「はい。それではまず地球連邦政府がわが星と安全保障条約を結ぶ意向を持っていることを、わたくしが惑星政府の与党外交部会の有力メンバーに急ぎお伝えいたします。与党外交部会では毎月 12 日に外交方針についての定期討論会が開催されますので、早ければ来月にはそこの議題に載せていただけるかもしれません。外交部会で十分に討議を尽くして安全保障条約が我が星の星益に叶うと結論されれば、有志議員と法務関係者が条約のたたき台を作成し、次に与党の政策調査会に提出いたします。政策調査会の開催は毎月 5 日です。この政策調査会では外交関係者のみならず経済、防衛、教育文化、科学技術などのスペシャリストも交えて条約について総合的な討論を行い、その結果を踏まえ、法制局が正式な条約文の作成に着手いたします。こうしてできあがった条約の原案は、他の法制の審議状況を勘案しながら機を見て惑星議会に提出されますが、これが認められるかどうかは野党の態度次第、すなわち議会戦術が絡んでくるのでそのときの政局に大きく左右されますね」
「・・・」
「議会での承認が得られれば次は我が星の外務局と地球連邦政府の事務レベル協議が開始され、合意点にめどが立ったとこ

ろでいよいよ両星の外務長官レベルの交渉となり、それぞれの代表者が署名をしたことでこの条約は締結されます。締結された条約は再び惑星議会に持ち帰り、与野党折衝の上で運が良ければ批准に至りますが、ここもまた与野党の議会戦術が絡んでくるので一筋縄では参りません。そこを乗り切って批准に成功すれば、安全保障条約はある一定の準備期間を経た上で晴れて発効となり、これをもってわがスンゲデッカ星防衛軍は地球防衛のために派兵することが可能になります」
「き、気が遠くなるような話じゃが、で、ぶっちゃけいまから始めてこの安全保障条約が発効するまでどのくらいかかりそうなのじゃ？」
「そうですねえ、通常ならば5年以上はかかりますが、このたびは地球にとって緊急の案件と言うことで、急ぎに急いで3年、いや、運が良ければ2年半で発効にこぎ着けられるかもしれません」
「に・・・2年半」
無理だ
一方的に侵略されている地球が2年半も持つわけない
「そんなに待てんよ。その間に地球は滅ぼされてしまうよ。なんとかならんかね？」
「これ以上のスピードアップは無理でございます」
パープル警視正は申し訳なさそうに、でもどことなく他人ごとのようなどうでも良さも漂わせながら小さく首を振る
まあ、それはそうだろう
安全保障条約締結を急いでいるのは地球だけ
スンゲデッカ星にとっては何のメリットもないこの条約締結を、彼らがわざわざ特別扱いしてくれるとは思えない
事務総長はがっくりと項垂れた
「というわけで、スンゲデッカ星政府としては今すぐに地球のお役に立てることは難しいようです」
「ふう、そうか。残念じゃが、あんたが謝るような話でもないわい」
そこでパープル警視正はおずおずと一つの提案をする
「・・・ですが、地球にとって望みの綱が全くない、わけでもない・・・かもしれません」
「なんじゃと？」
事務総長が、急に視線を上げた
「何か、良い手があるのかね？」
「ええ、スンゲデッカ星人の傭兵を雇ってみてはいかがかと」
「傭兵？」
「そうです。失礼ながら、地球の防衛程度なら武装したスンゲデッカ星人が一人いれば十分なのでは？」
なるほど、その手があったか
確かにスンゲデッカ星人ならたった一人でも地球防衛軍とは比べものにならない戦闘力だ
しかも傭兵は金で雇われた私人なので、いくら法手続きにうるさいスンゲデッカ星政府も許認可手続きは簡単だろう
やったあ！と浮き足立つ事務総長にパープル警視正は釘を刺す
「確かに手続きはかなり簡略化されますが、それでも出国手続きは必要です」
「結構かかるのかね？」
「いや、そんなことはありません。まあ一ヶ月も見れば大丈夫でしょう」
「一ヶ月・・・」
またしても下を向きかけた事務総長を制して、パープル警視正は言葉を続けた」
「実はそれに関してラッキーな情報があります」
「？」
「いま手元に警察庁が管理するわがスンゲデッカ星人の傭兵応募リストがあります。匿名ですが、連絡先は記載されているのでコンタクトを取ることは簡単です。ここに、なんと一人、地球への派遣希望者がいるのですよ」
「！」
「既に派遣の希望が提出され、それ自体は我が星の政府で受理されていますので、後は受け入れ先の惑星、この場合は地球ですが、そこの政府が確かに雇用する意図があると正式に表明すれば、スンゲデッカ星は即座に渡航許可を出すはずです」
「ということは？」
「ワープで参りますので本日中にも派遣可能かと」

「決めた！」
事務総長は即決した
「その傭兵を雇おう。すぐに地球連邦政府が受け入れる確約をスンゲデッカ星政府に送る。だから直ちに地球に来てくれ！」
「ちょっと待ってください。雇用条件を確認しなくていいんですか？傭兵だから、ギャラは高いですよ」
「いくらだね？」
「ええと・・・成功報酬として1600万コスモ・ドルの一括払いだそうです」
「なーんだ、1600万ドルって、思ったより良心的な価格じゃないか。全然問題ない。即金で支払う」
「他にも契約内容の詳細は・・・
「いいよそんなもの。こっちは一刻を争う状況なのじゃよ。電子署名を今この場で送る。だから一刻も早くその傭兵を地球に派遣してくれたまえ。一刻も早くじゃぞ！じゃあな！」
事務総長はあわただしく電子署名のファイルを送りつけると意気揚々とテレビ電話のスイッチを切った
残ったパープル警視正は半ば呆れながらリストに載っていた地球への傭兵希望者の電話番号に連絡を取る
「・・・もしもし、こちらスンゲデッカ星警察庁ですが、おたくは地球への傭兵希望ということでよろしかったでしょうか？」
「はい、そうです」
意外にも声の主は若い女性だった
それでも地球防衛くらいの仕事なら問題ないだろう
パープル警視正は用件を切り出した
「実は地球連邦政府から連絡があって、雇用条件は全て呑むので今すぐ地球に来てほしいと・・・」
「了解です！すぐに向かいます！」
弾む声を聞きながら、パープル警視正は一抹の不安を覚える
「・・・なんか聞き覚えのある声だけど、お名前を伺ってもよろしいかしら？」
答えを聞いて、パープル警視正は絶句した

＊＊＊＊＊

「ダメです、戦車部隊は全滅です」
「戦闘機も既に多数は撃墜されました」
「うーむ」
謎の巨大戦闘ロボットは、武骨な姿からは予測できないほどの高速で空を飛びまわり、パンチ一発で地球防衛軍の戦闘機を撃墜し続ける
一方で、自らはミサイル攻撃を受けても全くのノーダメージ
地上に降りてくればその巨大な体で縦横無尽に暴れまわる
なにしろ20階建てのビルに相当する大きさである
戦車も、兵士も、一般市民も、見境なく踏みつぶされた
この無双する巨大戦闘ロボットが1000体もいるのである
絶望的な戦況を踏まえ、地球防衛軍長官は腕組みをして天を仰ぐ
何か
何か
打開策はないか
・・・
・・・
そのとき、地球連邦政府事務総長から連絡が届いた
「朗報じゃ！助けがくるぞ！」
「と、申しますと？」
「傭兵を一人雇ったのじゃ」
「傭兵？・・・たった一人ですか？」

「一人とはいえスンゲデッカ星人じゃぞ。その戦闘力はお前も良く承知しておるじゃろう」
スンゲデッカ星人か
なるほど、それならば確かに一人の傭兵でも相当の戦力になるだろう
「で、救援はいつ頃到着の見込みで・・・」
と、訊ねかけたところで南東の上空に虹色の雲が現れ、その中から徐々に超巨大な宇宙船の姿が現れた
宇宙船はその輪郭が鮮明になると、高度を下げてトキオ・ベイに着水する
なんと早くも援軍の傭兵が到着したのだ
会議や法の整備などにはやたら時間がかかるスンゲデッカ星だが、決まった後の行動スピードは迅速だ
着水した超巨大宇宙船のハッチが開く
地球の救世主の登場だ
・・・
胸いっぱいの期待と歓喜を込めて宇宙船を見守る地球人たちは、現れたその巨大な救世主の姿を見てずっこけた

「・・・ふふふ、お久しぶり。キミたち、相変わらず小さいね💛」

ユキ・シュライク・イッテラー18λJK
あの地球を滅亡寸前まで追い込んだ性悪超巨大娘ではないか
性格は最悪だがルックスだけはガチな誰もが認めるS級美少女
つくづく、人は見た目だけで評価してはいけない
ただし今回の装いは前回来襲時のハイスクールのユニフォーム姿ではない
全体がメタリックオレンジゴールドでコーディネートされたヘッドセット、ビキニ、グローブ、そしてロングブーツである
解説しよう
これが、スンゲデッカ星人が他星に遠征する際のスタンダードな武装コスチュームなのだ
パワーヘッドセットは視力・動体視力・聴力などを極限まで高めるため、戦闘のための情報収集力をアップさせるだけでなく小さな生命体との直接的なコミュニケーションをも可能にする
パワーグローブは巧緻運動能力をありえないほど高めるため、増幅された視力・動体視力に見合った精緻な動きで小さな生命体やその生命体が作り上げた建築物・乗物などを無駄に破壊することなく取扱うことが可能になる
パワーブーツを装着することで、もともと高かったスンゲデッカ星人のパワー・スピードなどの基礎身体能力は更にブースターがかかり戦闘能力が激増する
そしてビキニ型のパワースーツはそれぞれ上半身・下半身に加えられたあらゆる物理的攻撃を受け止めて高エネルギー外傷を防ぐ強力な防衛力を担保する
このように、もともと戦闘力の高かったスンゲデッカ星人は、この武装コスチュームをフル装着することで天下無敵のワンマンアーミーと化すのだ
だからといって、侵略された記憶も生々しい地球にとって、武装したユキの到来は心穏やかなものではない
ただちに地球防衛軍長官が突っ込んだ
「・・・ユキ・シュライク・イッテラー18λJKだな？」

「あら長官、その節はどうも」

ユキはしれっと小さく頭を下げる
尋問を続けようとした長官は、やや違和感を覚えてたじろぐ
「き、君・・・以前より、大きくなってないか？」

「ん？そうかな？今日はヒールの有るブーツを履いてることもあるけど・・・でも確かに、ちょっと成長しちゃったかも」

ユキはわざとらしく背筋を伸ばして自分の身体の大きさをアピールする
うおおおおおおおおお
そのあまりの巨大さに足元の地球人たちからどよめきが起こった

「・・・ボクは成長期だから、まだぐんぐん大きくなってるんだよ。小さいままのキミたちとはまた差が広がっちゃったね、あはははは」

高笑いするユキに向かって長官は厳しく問い詰める
「君は地球で罪を犯して逮捕されたはずじゃないか！犯罪者がこんな仕事に応募して良いのか？」

「ああ、あの件は罰金払ってもうチャラになったから」

「チャラって、そんな・・・」

ユキは開き直って抗弁する

「長官、前科者を差別するのは人権擁護の視点からいかがなもの？それに今回のお仕事は傭兵でしょ？地球では前科者どころかバリバリの受刑囚がなぜか釈放されて傭兵隊に参加するのも全然普通、って、聞いてるけど？」

「・・・」

「ということで、ボクが地球の傭兵として働くのは問題ないよね？」

「しかし・・・」

「ダメだ、というならそれでもいいよ」

ユキはぴしゃりと言い放った

「今回ボクが傭兵に応募したのはお小遣いが欲しかったからだよ。それだけの話。お金をく

れないならさっさと帰るから。もともとボクはキミたち地球人のことを助けようとかそういう気持ちは全然ない。侵略者に滅ぼされたってザマあ見ろと思うだけだよ。で、どうなの？ボクはこのまま帰った方がいいの？」

「いやいや、それは困る」
地球連邦政府事務局長が割って入った
超音速専用機で急遽ネオ・トキオにやってきたのだ
「長官の失礼な言動は許してくれ給え。どうか契約通り、傭兵の仕事を頼む」
「しかし事務総長」
「しかしも何もあるか、地球の危機なんじゃぞ。いくら信用できない相手とはいえ、支払いは成功報酬なのじゃから、金目当てというなら尚更真面目に侵略者退治はしてくれるじゃろう」
「・・・」

「それでは、契約はそのまま、ってことでいいかな？」

「もちろんじゃとも」
事務総長の返答を聞いて、ユキは頷きながら忌々しそうに横目で長官をにらむ

「じゃあ、ボクは契約に従って戦闘を開始するよ。地球防衛軍のみんなは邪魔だから後ろに下がっていてね。どうせキミたち何の役にも立たないもんね、ふん！」

＊＊＊＊＊

そのわずか 30 分後
戦闘はあっさり終了していた
前線の部隊長が地球防衛軍長官に詳細について報告する
「・・・謎のロボット軍団は全滅しました」
「ほお」
「それまで圧倒的に侵攻していた巨大戦闘ロボット軍団でしたが、あの巨大傭兵少女の参戦で状況は一転しました。実際に、私自身も危ういところで命拾いしました」
「それは幸いだったな」
「わかりやすいように、恒例のサイズ比較図を用意したので説明します」
前線の司令官がスクリーンに画像を投影する
「謎の戦闘ロボットは体高 60 メートル。地球人の身長の 30 倍以上で、20 階建てのビルに相当する高さです。赤枠の中に地球人や地球防衛軍の戦車との対比を示しました。ご覧のように戦車なんか余裕で踏みつぶしてしまう巨大さです。実際に、重量も 3000 トンくらいあると推定されており、踏みつけられた戦車は瞬時にスクラップにされてしまいました」

「うむむ」
「ところがこの巨大戦闘ロボットも身長3560メートルの超巨大傭兵少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJK の前ではご覧の通り。彼女から見たら体感的には体高 3 センチメートル、重量10g 程度にしかなりません」
「そんなに体格差があるのか・・・」
「本人も言ってましたけど、成長期の彼女はまた一回り大きくなったみたいですね。しかも今回は高いヒールを履いているので、それも込みにした身長は優に 3700 メートルを超えます。でかいでかい。まるで、歩く富士山少女、という感じで、比較材料に隣に置いてみたトキオ・タワーやトキオ・スカイツリーまで玩具みたいに見えます。体高 3 センチメートル、重量 10g 程度のロボットなど虫も同然、全く敵ではありませんでした。」
「・・・」
「ロボット側が逃げなかったのも大きかったです。そういうふうにプログラムされていたのでしょう。もう数に任せてわんわん攻めてくるのですが、サイズ差がありすぎるので、ユキ・シュライク・イッテラー18λJK はこれらを片っ端から捕まえてそのまま握りつぶしたり、問答無用にブーツで踏み潰したり」
「あの巨大戦闘ロボが踏み潰されてしまうのか・・・」
「凄い大巨人っぷりですね。というわけで鎧袖一触やりたい放題。結局、ユキ・シュライク・イッテラー18λJK が、自分の巨大さ、強力さを思う存分見せつけるだけの結果になりました」
「・・・市民の被害状況は？」
「まあ市街戦ですから巻き込まれて負傷した市民は数多いですが、驚くことに死者はほとんどいませんでした。彼女もやはり傭兵として気遣ってくれたんでしょうかね」
「そんなことに忖度してくれるようなキャラには思えんがな」
長官は改めて苦虫を噛みつぶす
偵察兵は慌てて報告を続けた
「そんなわけで、超巨大傭兵少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJK は、ものの 30 分もかけずに戦闘ロボット 1000 体を全て破壊し終えました」
「うむ、それで破壊されたロボットはどうした？」
「はい、敵の科学力を探査する目的で破壊された残骸は回収するように、という指令でしたが、超巨大傭兵少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJK の話によると『この手のロボットは破壊しても破片から再生してまた暴れ出すことがある』そうで、危険だから回収は止めておけ、ということでした」
「ん？」
「確かに再生されたら厄介ですから、ここは彼女の勧めに従うことにして、ロボットの残骸は全て彼女の持参した装置で分子レベルにまで徹底的に分解してもらいました。これならさすがに再生する心配もないだろう、と」
「う、うーむ」
何か少し引っかかるところもあるが、しかしもう済んだことだから仕方あるまい
「・・・で？」
「はい、仕事も終わったので彼女は報酬をもらったらすぐに帰る、と」
「ふむ、さっさと帰ってもらえれば確かに有り難いな」
ここで初めて長官は首を縦に振ったのである

＊＊＊＊＊

地球には再び平和が訪れた
急遽雇ったスンゲデッカ星人の傭兵ユキ・シュライク・イッテラー18λJKが、侵略してきた謎の巨大戦闘ロボット軍団を一掃してくれたのである
まあ、いろいろと思うところはないこともないが、とりあえずこの件については素直に有難かった
「本当にありがとう。全地球人を代表して感謝申し上げる。」
ネオ・トキオのランドマークである超高層ビルの屋上に登った地球連邦政府事務総長は、ユキに対して深々とお辞儀をする
しかしユキはにこりともしない

「お礼なんかいいよ。ボクは傭兵として契約通りの仕事をしただけだよ。だからキミたち地球人も契約通りに報酬を払ってね。払ってくれたらボクはすぐにスンゲデッカ星に帰るから」

まあ傭兵らしいといえば傭兵らしいリアクションではある
事務総長は早速報奨金の詰まったアタッシュケースを差し出した
「それでは約束の1600万ドルじゃ」
ユキの表情が曇る

「・・・ちょっと待ってよ」

「ん？」

「1600万ドルって、それ地球でしか通用しない通貨で払うつもり？」

「え？」
呆気にとられる事務総長を後目に、ユキは言葉をつづけた

「・・・契約書に記載された報酬額は『1600万ドル』じゃなくて『1600万コスモ・ドル』だよ。スンゲデッカ星に住んでるボクが、地球のローカルカレンシーである『ドル』で報酬を受け取っても仕方ないじゃん」

え？
そうだったの？
事務総長は慌てて契約書を見直した
確かに契約書には、成功報酬として1600万『コスモ・ドル』を即金で支払う、と記載してある
「も、申し訳ない。地球にはコスモ・ドルの手持ちがないのじゃが・・・」

「しようがないわね。じゃあ、『ドル』で払ってもいいけど、ちゃんとレートに従って換算した額を払ってよね」

「と、いうと？」

「今日の銀河中央バンクの換算レートだと、１コスモ・ドル＝3125000000ドルだよ」

「！」
とんでもない換算レートだ
だが落ち着いて考えてみれば、科学も発達しておらず、取り立てた産業も資源もない地球のローカルカレンシーが、銀河規模で買い叩かれるのは当然だった
「・・・と、いうことは」

「この換算レートに従えば、1600万コスモ・ドルは500000000000000000ドルになるわね」

「！！！」

「わかりやすく言えば5京ドルよ。即金で払ってくれる、って契約書には書いてあるけど」

5京ドル！！！
想像もつかない高額だ
あえてここでネオ・ジパングの国家予算に例えてみれば、その約4万年分に相当する
4万年！
そんな大金、地球連邦政府にだって払えるわけがない
「そ、それは高すぎじゃ！とても払えんぞ！」

「あれ？仕事だけさせておいて賃金は払わないって？・・・いい度胸じゃん」

ユキは身を乗り出して事務総長のいる超高層ビルを真上から見下ろした
あからさまな威嚇である
事務総長は狼狽した
「ま、待て、待ってくれ。払えないのはこちらの手落ちじゃった。謝る。ほれ、この通りじゃ」
事務総長はその場で土下座して謝る
そんなことでユキの怒りは収まらない

「謝って済むなら警察はいらないよ。賃金が払えないということなら、担保物件をいただくまでのこと」

「担保物件？」

「そう、契約書にきちんと書いてあるでしょ？甲は乙に規定の報酬金を支払えなかった場合、担保物件である地球の主権を、住民である地球人の人権の取り扱いも含め、乙に無条件で提供する。ほらね？」

「！！！」
事務総長は顔面蒼白になってその場にへたり込んだ

「つまり、ボクが正式にこの地球の所有者になる、ということ・・・何か、文句ある？」

ここで初めてユキの鉄仮面のような表情が緩んだ

＊＊＊＊＊

地球は、その住民である地球人とその人権を含め、異星から来た超巨大性悪美少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJKの私有物となり果てた
これは双方が署名した契約書に記載された内容の履行、すなわち、一点の曇りもない合法的な転帰である
なお「人権が全てに優先する」すなわち「人権を絶対的に取り扱う」という考え方は、人権を有する対象が地球人しか知ら

れていなかった時代のものである
宇宙には数多くの知的高度生命体が生息している
それらの種族の「人権」は全て同じ重みを持つかどうか、今日でもなお議論が絶えない
そこで今日では、知的生命体の「人権」は「相対的に取り扱う」という解釈がコンセンサスを得るに至った
というわけで、相対的な「人権」は売買や譲渡の対象となりうる
その結果、地球人たちの全人権は合法的に超巨大性悪美少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJKの手に落ちたのである

「くくく、キミたち、今日も小さいね。踏み潰そうかな？やめて上げようかな？」

今日もネオ・トキオの街に現れた超巨大意地悪美少女の足下で、地球人たちは絶叫を上げて逃げ惑った

うわあああああああああああ

「あはは、いい気分だな。ボクはこの地球の所有者だよ。キミたちはボクから見たらアリンコ以下のゴミみたいなこびとだけど、加えていまやただのボクの私物さ。街ごと踏み潰してやってもいいんだけど、どうしようかなあ」

うわあああああああああああ
助けてくれえええええええ
頭上に巨大な足を振りかざされた地球人たちは、ただただ絶叫を上げながら逃げまどう
ユキは笑いをかみ殺しながらその様子をはるか上空から見下ろしていた

「くくく、ホントに惨めだねえ」

ユキは足下の地球人たちに言い放った

「じゃあ、踏み潰さないでおいてあげるよ、今はね」

おおおおおおお
地球人たちから安堵の声が起こる
その様子を鼻先でせせら笑いながらユキは言葉を続ける

「勘違いしないでね。ボクはキミたち地球人が大っ嫌いだよ。だってキミたち、３ヶ月前にボクに対して酷いことをしたよね。絶対に忘れないよ。だから簡単に死なせてなんかあげないからね。キミたちは、アリンコ以下のこびととして、ゴミくずみたいなこびととして、全人格と尊厳を奪われ、恐怖と、屈辱と、劣等感にまみれながら、ボクの足下でいつまでも惨めに暮らしていくんだよ」

ユキは、武装コスチュームからパワースーツとパワーブーツを脱ぎ捨て、ほとんど全裸の姿となった
微小で無力な地球人相手に、超大巨人であるユキがわざわざ攻撃力や防衛力を高めて応対する必要はない
パワーヘッドセットとパワーグローブで視聴覚と巧緻運動だけ強化すれば十分だ
そして無力な地球人たちに、「裸の巨大少女に全面服従する」という屈辱を与えてやるのだ
ユキはこれ見よがしに大股を開いて見せた

「じゃーん、どう？いい眺めでしょ？現役 JK がまっぱになってご開帳だよ。ほらほら、ちんちん勃ったかな？」

おおおおおおおおお
足下の地球人たちはどよめきの声をあげる
中腰になっているのに、ネオ・トキオのランドマークである高さ 700 メートルの超高層ビルが、その股間に届かないのだ
なんという巨大さだ
ぐっぱり開いた膣口からは、眼下の超高層ビルに向かって生臭い愛液がどばどばと滴り落ちている
その気になれば高さ 700 メートルの超高層ビルくらいちんぽのように一呑みできることは明らかだが、敢えて挿入はせず、上空から滝のように愛液を降り注がせて高笑いしている
小さな地球人たちに自分の巨大さを見せつけることで性的快感を覚えているのだろう

「くくく、現役 JK のまんこだよ。どアップで見せてやるよ。キミたちも男の子なら、えっちしてみたいでしょ？」

確かに超高層ビルの上階にいる地球人たちにとっては、手を伸ばせば届くのではないかと錯覚するほどの近距離である
彼らはすぐ目の前に開帳した超巨大まんこからもわもわと立ち上る酸っぱ生ぐさい淫臭を間近から否応なしに嗅がされ、確かにほとんどの男たちは勃起していた

「あはは、ねえ、ちんちん勃ったでしょ？えっちしたいんでしょ？でも残念でした。ボクはウルトラ大巨人の女の子なので、まんこもこんなにでっかいんだよ。せっかく勃ったキミたちのちんちんも、小さすぎて全然相手になりません。えっちなんか夢のまた夢でーす💖」

超巨大意地悪娘ユキは、大股広げたまま得意になって艶めかしく腰を振る
自分でも自信のあるこの肢体を、こびとたちに見せつけているのだ
蠱惑的な情景なのかもしれないが、なにしろ巨大すぎて、足下の地球人たちには天変地異のようにしか感じられない
地球人たちは、この巨大な美少女が自分たちにはとても手の届かない存在であることを痛いほど思い知らされた
ここまで全てユキの思惑通りである

「・・・わかったかな？キミたちはえっちの相手にもならない役立たずのゴミなんだよ。というわけで・・・」

ユキは邪悪な薄笑いを浮かべながら四つん這いになった
地球人たちは上空を見上げて腰を抜かした
まるでネオ・トキオの街全体に覆い被さるようなフルヌードの巨体である
空全体が美しい裸体に置き換わっていた
ただ、見とれている場合でも、腰を抜かしている場合でもなかったのである
遙か天空からオレンジゴールドに輝くパワーグローブを装着した巨大な手が、地表の彼らに向かって襲いかかる
うわあああああああ
逃げたところでリーチの差は歴然だ
地表に舞い降りた巨大な手は、逃げ回る微小な地球人たちを容赦なく摘まみ上げていく
これがパワーグローブの威力である
巧緻運動能力が極限まで増幅されているので、超大巨人のユキにしてみたら砂粒も同然の小さな地球人の華奢な身体でさえ、無駄に潰すことなく器用に摘まみ上げることができるのだ
たちまちユキの手のひらの上には数十人の地球人たちが乗せられた

「くくく、女の子の手のひらに乗せられちゃった気分はどう？えへへ、自分たちの小ささを思い知った？悔しい？」

地球人たちは震えながら不安そうに上空を見上げる
意地悪そうな笑みを浮かべた少女の顔が、見渡す限りの空いっぱいに広がっていた
圧倒的な力を持つ超大巨人に生殺与奪の権を握られて、地球人たちは諦め気味に問いかけた
「・・・こ、これから俺たちを、どうするつもりだ？」

「ふふん」

ユキは意地悪そうに鼻を鳴らす

「キミたちってばさ、自分たちをいっぱしの人間だと思ってるんでしょ？でもさ、見てごらんよ、キミたちってこんなに小さいんだよ。ほらほら、ボクとはこんなに大きさが違うんだよ。それでもまだ自分の立場がわからないの？笑っちゃうほどおバカだね」

超巨大いじわる少女ユキは、手のひらの上の地球人たちの上に人差し指をかざす
お前たちなんかこの指一本でみんなまとめて潰せちゃうんだぞ、という無言のブラフである

「でね、ボクはキミたちの所有者になったんだから、これからはしっかり教育するよ。ちゃんと立場を弁えようよね。ボクは巨大なご主人様。キミたちは小さな小さなこびとの奴隷だよ。

まず、みんなその場で土下座しなよ。そして『わたしたちはごみのように小さなこびとです。ご主人様、どうぞわたしたちを潰さないでください』って大きな声でお願いしてごらんよ」

地球人たちは迷うことなくその場で即座に土下座した
そして力いっぱいの大声を張り上げて懇願した
「わたしたちはごみのように小さなこびとでーす！ご主人様、どうぞわたしたちを潰さないできうださーい！」

「あはははは、やればできるじゃん」

ユキは満足そうに笑うと、手のひらの上の地球人を再び摘まみ上げてむき出しの乳房の上にぱらぱらと落とした

「さあ、こびとはこびとらしく、ボクの乳首の上に登って万歳三唱してごらん」

乳房の上に落とされた地球人たちは、そこから屹立する乳首に必死でよじ登り、その場で声を張り上げて万歳三唱した
バンザーイ！
バンザーイ！
バンザ＾イ！
生意気な小娘の悪ふざけだが、相手は絶大な力を持った超大巨人の意地悪娘である
生き残るため、彼らにはこの屈辱的な命令に従うしか選択肢がなかった

「くくく、惨めだね、恥ずかしいね。悔しいでしょ？ねえ、本当はこんな恥ずかしいことさせられて、凄く悔しいんでしょ？あはははは」

悔し涙を流しながら万歳三唱する地球人たちの惨めな姿を見て、ユキは嘲り笑う

次にユキは残った地球人たちを次から次へと自分のまんこに押し込んでいった
さっき、えっちの相手にもならない役立たずのゴミと罵ったばかりなのに
・・・

「もちろんキミたちなんてまんこに入れても何も感じたりはしないよ。あたりまえじゃん、キミたちどちびなんだから。えっちの相手になんかなるわけありませーん。そうじゃなくて、キミたちはそこでボクのまんこの掃除をするのさ。きちんと働いたら外に出してあげるよ。まあ、せいぜい頑張ってね。ボクのまんカスはキミたちよりずっとでっかいよ。そして臭い。だからキミたちには重労働になるね、くくくく、ちびは大変だね」

「・・・」
そんな人間の尊厳を踏みにじられるようなことを言われても、生き残るためには黙って従うしかない
地球人たちは意を決して、巨大な意地悪美少女の悪臭極まりない膣内で気の遠くなるような清掃作業に取りかかった

「くくく、ホントにボクのまんこを掃除してくれるんだね。キミたちプライドも何もないんだね。当たり前だけど、人権なんかもうないんだもんね。くくく、じゃあ、ちゃんとお仕事するんだよ。中でさぼって勝手にオナニーとかしてちゃダメだよ、あはははは」

これだけ屈辱的な言葉を投げかけられ、屈辱的な命令をされても、地球人たちは黙々と従う
そう、ここがポイントである
無闇に殺したりしないので、地球人たちは生への執着を捨てられない

だからこそ、生きるために屈辱的な命令にもとりあえず従うのだ
そしてとても受容れられないような屈辱的な命令でも、一度クリアしてしまえば心理的ハードルが下がる
そうなると次はもっと屈辱的な命令にも従えるようになる
かくして超巨大性悪娘ユキの命令はどんどんエスカレートして過激になっていくが、地球人たちは黙々とそれに従い続けるようになるのだ
こんな状況にありながらも、ネオ・トキオの市民たちは自宅に引きこもることは許されず、普通の日常生活を送るように強要されていた
ユキの奴隷として恐怖と屈辱と劣等感にまみれた普通の日常生活を送ることを
そして日常生活の一環として、無差別に摘まみ上げられては屈辱的な遊興の道具にされることを
それがユキの地球人たちへの復讐だった

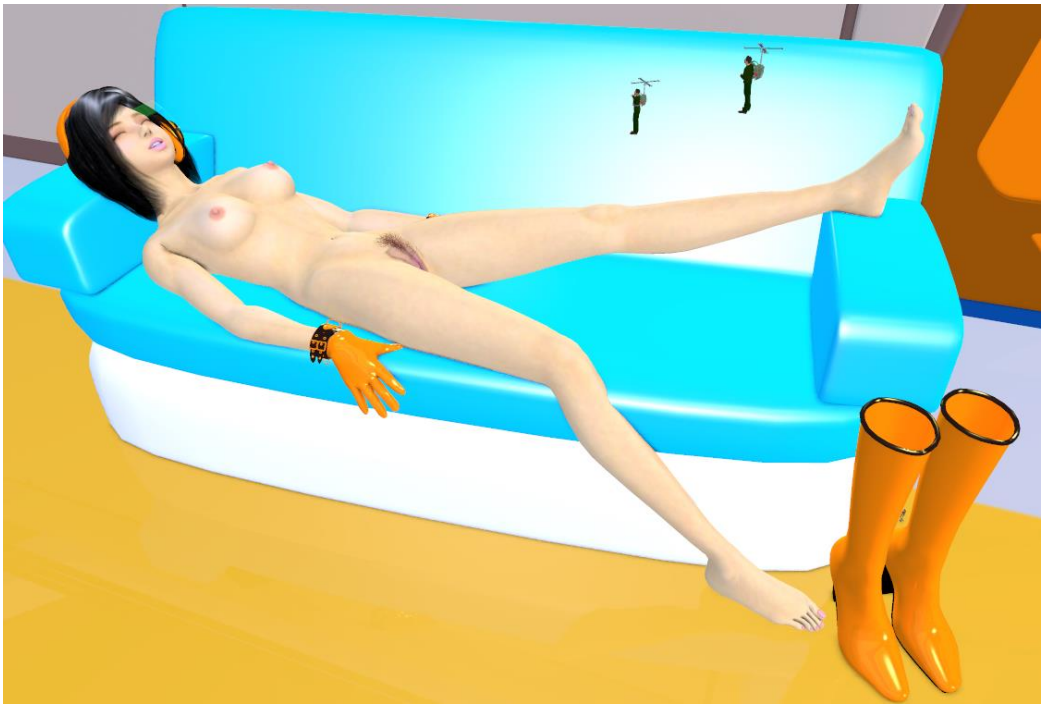
＊＊＊＊＊

街角から超巨大性悪美少女ユキ・シュライク・イッテラー18λJKのやりたい放題を見上げながら、地球防衛軍長官は呟いた
「・・・解せないな」
長官のつぶやきに傍らのエリック・チャン広報官も同意する
「長官もそう思われますか？」
「展開が、彼女にとっていろいろと都合良すぎる」
「偶然には思えませんよね」
「わけないだろう」
長官は吐き捨てた
「必ず裏があるはずだ。確かめに行く」
「ちょっと待ってください」
エリック広報官が慌てて押しとどめる
「彼女の寝泊まりする宇宙船に潜入するんですね？」
「そうだ」
「ダメですよ、組織のトップである長官が、自らそんな危険なミッションに身を投じるなんて」
「俺はもう組織のトップなんかじゃない」
防衛軍長官は首を振った
「地球防衛軍は解体された。この地球の所有者であるあの女によってな」
「・・・」
「今の俺はただの一人のおっさんだ。一人のおっさんが何をしようと、おっさんの勝手だろ？」
「くくく」
エリック広報官は笑いをかみ殺す
「なるほど、では僕がお供いたしましょう」
防衛軍長官は目を見開いてエリック広報官に向き直る
「わかっているのか？危険なミッションだぞ」
「だからお供するんですよ。こんな大切なミッションを、ただのおっさん一人に任せておけますか？」
「ふっ」
今度は長官が笑いをかみ殺した
「・・・わかった。では、一緒に行こう」
こつん
二人はグータッチする
ターゲットはトキオ・ベイに停泊中の超巨大宇宙船
決行は明日の明け方である

＊＊＊＊＊

ほんのりと薄明るくなってきた午前４時
個人用ヘリパックを装着した長官とエリック広報官の２人は、海面ギリギリを飛行しながら超巨大宇宙船のすぐ近傍にまで接近していた
「・・・あれ？ハッチが開いてますね」
エリック広報官の指さす先では、確かにハッチが解放されていて、宇宙船内には自由にアプローチできそうだった
「無防備だな」
「我々地球人の来襲なんか脅威でもなんでもない、ということなのでしょうか？」
「いや・・・」
長官は小さく首を傾げる
「・・・誘っている、という可能性もある」
「！」
エリック広報官の顔色が変わる
一方で長官は眉毛一つ動かさない
「だからといって、我々に撤退するという選択肢はない」
エリック広報官も腹を決めた
「わかりました。せっかく女の子が誘ってくれているのに、大の男が尻込みするのも情けない」
「そういうことだ」
２人は意を決して船内に侵入した

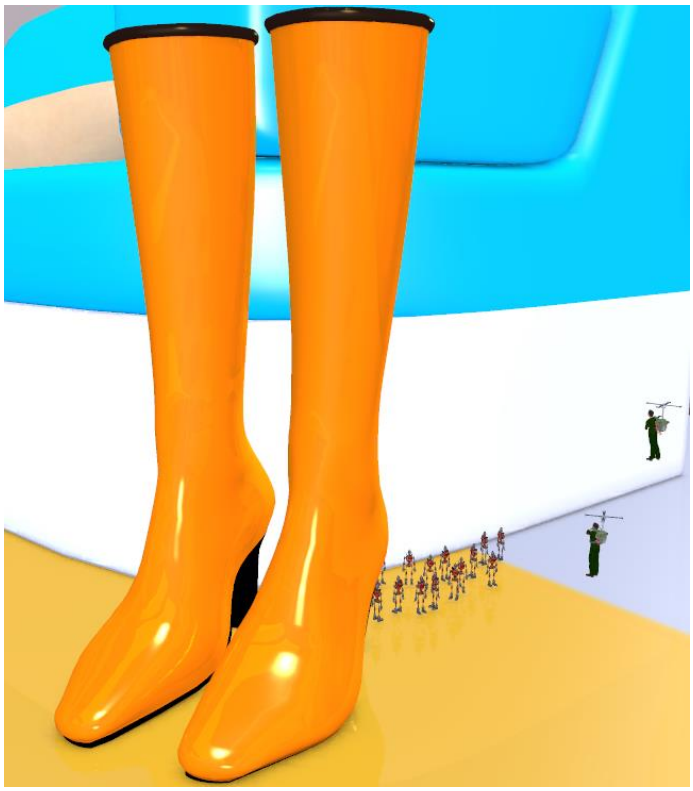
＊＊＊＊＊



宇宙船の外観は巨大だったが、侵入してみると、内部はそれに輪をかけて不自然なほど広大だった
おそらく空間に何らかの操作が加えられているのだろう
これならば超巨大なスンゲデッカ星人でも快適に過ごすことができそうだ
逆に、侵入した地球人の２人にとっては違和感が半端ない
何もかもが巨大すぎる
そう、このスンゲデッカ星人のスケールに合わせた空間では、彼らが大巨人なのではなく、地球人がこびとなのだしかもどうしようもなく小さいゴミのようなこびとである
ヘリパックを装着していた２人はまるで小バエになったかのような錯覚に陥っていたが、実際のところスンゲデッカ星の小バエは地球人の彼らより数十倍は大きいだろう
もちろん侵入するにはその方が好都合なのだが、これほどのサイズ差のある相手に挑むことの困難さを２人は実感していた
「・・・あの性悪巨大娘が我々地球人を人間扱いしない理由も、なんとなく理解できますね」
「そんなこと理解できてどうする」
反論してみたものの、さすがの長官もやや気圧されている
これではいけない
エリック広報官は話題を変えた

「それにしても・・・凄い身体ですねえ」
就寝中の超巨大な少女を指さす
地球の所有者となったスンゲデッカ星人ユキ・シュライク・イッテラー18λJKその人である
まるで自分のゴージャスな身体を侵入者の2人に見せびらかすかのように、無防備な全裸姿であった

「・・・巨大であることを抜きにしても、スタイル良すぎですよ。まず、とんでもない脚の長さです。だからトータルバランスで見ればスリムなのに、ほどよくむっちりしてて、出るべきところはしっかり出てる。巨乳といってもいいんじゃないですか？ホント誇張なしに山みたいな乳房ですよ。でかいでかい。これが地球人換算でまだ 18 歳なのだそうですから、これからどう成長していくか。身長ですらまだ伸びてる途中だというんですから、もう末恐ろしいです。顔だってガチで可愛いS級美少女だし、しかもそれでいて小賢しいほど頭も切れる。別に犯罪者にならなくても社会でしっかり成功して行けたでしょうにね」
「犯罪者としても成功してるけどな」
長官は興奮気味にユキの身体を品定めするエリック広報官をシニカルに受け流す
「そんなことより、ほら、興味深いものがあるぞ」
長官はユキが寝ているソファーの片隅を指さした
「あ！」
指さす先には、あの地球を襲ってきた謎の巨大戦闘ロボットが無造作に何体も置かれていた



「・・・戦闘時に鹵獲してきたものでしょうか？」
「いや、違う。この女は地球に展開していた戦闘ロボットを、一体残らず分子レベルにまで破壊したはずだ」
「と、いうことは」
「マッチポンプだな」
長官は自らに確かめるように大きく肯いた
「あの戦闘ロボットの来襲自体がこの女の仕組んだ茶番だったのだ。それで地球を危機に陥れておいて、自らは地球への傭兵派遣の希望を登録しておく。すぐに地球に渡航できるのは自分しかいないという状況を作っておいて、素知らぬ顔で地球に自分を選ばせるという算段だ。法外な費用の請求も存亡の危機にある地球は呑まざるをえない。そして支払いできない地球をまんまと自分のものにすれば、後は以前煮え湯を飲まされた地球人たちに思いっきり復讐するだけ、と」
「なるほど」
「ほらな、犯罪者としても、十分に優秀だろ？」
「ええ、でも尻尾を掴んでしまえばこちらのものです」
カシャ
カシャ

エリック広報官は持参したカメラで証拠写真を撮りまくった
「さあ、証拠をゲットしたからには、こんなところに長居は無用です。一刻も早くネオ・トキオに戻って、あのスンゲデッカ星警察のミニスカ婦警さんに通報しましょう」
「ふむ」
2 人は一目散にその場を去って、解放されたままのハッチから宇宙船外に退散した
・・・
・・・
ややあって
・・・
就寝していたはずのユキは薄目を開ける

「・・・ふふふ、あれで証拠を掴んだつもりなのかな？」

侵入を企てた 2 人は、ユキが装着していたパワー・ヘッドセットの機能を過小評価していた

＊＊＊＊＊

既に日も高く登った午前 10 時
地球の所有者のとなった超巨大いじわる娘ユキは、今日も全裸にパワーヘッドセットとパワーグローブのみ着用というラフな姿で、自らの私有物である地球人たちを玩具にしてえっちな遊びに耽っていた
そんなとき、例によって東南の空に虹色の雲がかかり、徐々に巨大宇宙船の輪郭が明瞭になる
ハッチを開けて中から出てきたのはユキ同様に超巨大なミニスカ婦警さん
スンゲデッカ星警察庁のパープル警視正である

「・・・ユキ・シュライク・イッテラー18λJK さんですね？」

「そうだけど」

ユキは特別慌てるそぶりもなく答えた

「この地球はボクのプライベート空間なんだけど、そこへアポもなしにいきなり訪ねてくるなんて、お巡りさんにしてもちょっと失礼だね」

「申し訳ありません」

パープル警視正はあっさり謝る

「しかしながら、あなたがこの地球でまた罪を犯しているという通報がありまして、宜しければ任意でお話を伺えないかと思って参りました」

「いいけど」

ユキは口を尖らせる
しかし、どことなくその表情には余裕が見て取れた

「で、通報って、どういう内容？」

「あなたが傭兵として掃討した侵略者の戦闘ロボット集団は、実はあなた自身が地球に送り込んだものである。つまり、あなたは自分で侵略を仕掛けておいて地球政府を騙し、その結果この地球の全権を手に入れた。スンゲデッカ星刑法第1032条違反、いわゆる他星侵略罪を犯しているという通報です」

「ふーん、で、証拠は？」

そこで地球防衛軍のヘリコプターに乗ったエリック広報官が割って入った
「証拠写真があります。今お見せします」
上空に巨大なスクリーンが現れ、そこに向かってヘリコプター内のプロジェクターから映像が投影される
「・・・これがユキ・シュライク・イッテラー18λJKの個人用宇宙船の内部です。右下に注目してください。ズームします」
映像がズームされる
おおおおお
見上げる地球人たちからどよめきの声が上がった
「ご覧のとおりです。地球を襲ってきた巨大戦闘ロボットと寸分違わないロボットを多数発見しました」

「・・・それで？」

ユキは全く動揺しない
かえってエリック広報官の方が浮足立った
「こ、こんなものを保持しているんだから、あなたがあのロボットを送り込んできた犯人であることは明らかだ！」

「それは無理ですわ」

意外にもパープル警視正が首を横に振った
エリック広報官はいよいよ慌てふためく
「どうしてですか？地球を襲ってきたロボットと、全く同じものを保有していたんですよ！」

「あれは量産型の玩具だよ」

ユキは顔色一つ変えずに答える

「スンゲデッカ星では子供のいる家庭ならどこにでも置いてあるよ。お祭りに行くと屋台では一山いくらで売ってるくらいだよ」

「・・・残念ながらそのとおりでございます」

パープル警視正も言葉を引き継ぐ

「スンゲデッカ星ではあまりにもありふれた玩具です。もちろん、これが犯行に使われたの

なら犯人はスンゲデッカ星人である可能性が高いですが、かといってユキ・シュライク・イッテラー18λJKさん個人に紐づけることはできません」

「そ、そんな馬鹿な・・・」

「どうしても紐づけたいなら、実際に犯行に使った玩具を調べてみなければなりません。製造番号から購入経路を絞り込み、実際に購入したのは誰かを割り出すのです。そういう捜査ができそうでしょうか？」

「！」
エリック広報官は絶句した
破壊された巨大戦闘ロボットの破片は全く残っていない
全てユキ本人の手で分子レベルにまで分解されてしまった
もはや製造番号を調べることなど不可能である
くそ
あれは証拠隠滅操作だったのか

「紐づけができなければ、証拠不十分です。証言や心証だけでユキ・シュライク・イッテラー18λJKさんを逮捕することはできません」

「むむむ」
歯ぎしりするエリック広報官を横目で見ながら、ユキは勝利の薄ら笑いを浮かべる

「というわけで、無駄足になっちゃったね。」

「いえいえ、こちらは任務とあれば手間は厭いません」

「でもそれじゃボクの気は済まないよ」

ユキはエリック広報官の乗り込んだヘリコプターをにらみつける

「ボクの私物であるこの地球人がお巡りさんに迷惑をかけたんだから、所有者として黙って見過ごすわけにはいかないよ。ねえ、広報官の若造くんと、そこには一緒に旧地球防衛軍の長官もいるんでしょ？」

図星である
ヘリコプターの中にはエリック広報官の傍らに長官の姿もあった

「キミたち２人には以前も酷い目に遭わされたよね。そして今回もこそこそと動き回ってた。ああ、うざい。ボク、絶対に許さないから」

ユキはパープル警視正に向き直る

「ボクの私物であるこのうざい地球人２人を、ボクがどう始末しても、ボクの自由だよね？」

「・・・あなたは契約上『担保物件である地球の主権を、住民である地球人の人権の取り扱いも含め、無条件で』取得しています。あなたが自分の私物であるその地球人２人をどのように扱おうと、公僕であるわたくしは一切止める権利を持ちません」

「そういうことだよね」

小さく頷くと、ユキは満面の笑みを浮かべながらエリック広報官と防衛軍長官の搭乗するヘリコプターを指２本で巧みに摘み取った

「捕まえた」

「うわあああああああああ」

「ふん、こんなに小っさいこびとのくせに、よくもボクに何度も逆らってくれたね」

「わ、我々を潰す気か？」
震え声で訊ねるエリック広報官を鼻先でせせら笑う

「ふん、ボクは自分の私有物の地球人たちをできるだけ殺さないようにしてきたけど、でも、キミたちは別だよ。しかも、ただプチンと潰すだけじゃ気が済まないね。まんこの中で締め潰すのでももの足りないな。この上ない絶望と屈辱を与えて、ボクに逆らったことを心から後悔して情けなく泣きわめきながら最期を迎えるようにしてやる・・・そうだ」

ユキはくるりと後ろを向いて、２本の指で摘まんだヘリコプターを突き出した自分の巨大なヒップに正対させた
「な、なにをする気だ？」

「くくく、よーく見えるでしょ？ボクのアヌス。臭うかな？くくく、中はもっと臭いよ」

「！」

「キミたちはこれからそこに入るのさ。くくく、女の子のいちばん臭い穴。中に入ったら、もう出てこれないよ。ボクの肛門括約筋は強力だからね、くくく。そこでキミたちは、乏しい酸素を求めてくっさいくっさいメタンガスを胸いっぱいに吸いながら、じわじわとボクのうんちに潰されて死ぬのさ。くくくくく、その後はちゃんと大勢の地球人たちに見てもらうよ。くっさいうんちの中で、キミたちが惨めに潰れた姿をね。ネオ・トキオのど真ん中に排便してやるから、きっと大勢が見てくれるはずだよ。地球人たちも自分たちの無力さを思い知って、もう二度とボクに逆らおうなんて思わなくなるだろうね、くくくくく、あは、あはは、あはははははははははははははは」

狂気を顕わにして笑い転げるユキ
パープル警視正も申し訳なさそうに視線を逸らすだけ
法に守られたこの狂った超巨大いじわる娘を、止める権限を持っていないのだ
まさに万事休す
頭を抱えて蹲る２人の眼前に、悪臭を放つ超巨大な菊門が迫りくる
これまでか
・・・
と、思ったまさにその時
・・・
・・・
「待ちたまえ！！！」
威厳に満ちた声が響き渡り、意表を突かれたユキは思わずヘリコプターを手放した
エリック広報官が素早く機体のバランスを立て直し、間一髪でその場から逃れる
一方、良いところで邪魔されてしまったユキは忌々しそうに声を荒げた

「・・・誰？」

＊＊＊＊＊

「わしじゃ」
声の主は誰あろう、地球連邦政府事務総長であった
事務総長は、スマホのような通信機端末を手にしつつ、ヘリコプターから身を乗り出して、大声を上げていた
「おおい、パープルくんといったかね、そこのミニスカ婦警君」

「はい、パープルでございます」

パープル警視正は事務総長の乗り込んだヘリコプターに向かって、慌ててぺこりとお辞儀する
「うむ、パープルくん、キミもあの娘の共犯者じゃ」

「はい？」

意表を突かれてパープル警視正の目が丸くなる

「あの・・・おっしゃっている意味がわからないのですが」

「うむ、キミもあの娘と一緒になってこの地球にロボットを送り込み、侵略行為を働いて、多くの地球人を虐殺したのじゃ。目撃情報はいくらでもある。わしがこの通信機の

スイッチを押せば、いま話した内容の告発文がスンゲデッカ星の政府とマスコミ各社に自動的に送信されることになる」
温和なパープル警視正もさすがに表情がこわばった

「わたくしを脅迫なさるおつもりですか？」

「おっとっと、ワシに手を出しても無駄じゃぞ。ワシにもしものことがあった場合は、この地球上の数百カ所から同時に文体を変えた同じ内容の告発文がスンゲデッカ星に送り出されるはずじゃ」

「ねえ、何を無駄な悪あがきしてるの？」

傍らから口を挟んできたのは性悪娘のユキである

「キミたちが罪をでっちあげようとしても、証拠がないじゃないの。当たり前だけど、証言を積み重ねただけじゃ有罪にはならないわ。いずれ間違いなく無罪放免になるよ」

「ふむ、確かにな。証言ばかりでは他人の有罪を証明することなどできん」
事務総長はユキの主張をあっさり認めた
その上で、言葉を続ける
「じゃが、全ての証拠物件が消えてしまった今、無罪を証明することも難しくなった」
ユキは猛然と反論する

「無罪は証明するものじゃないでしょ？有罪と証明できないものが無罪でしょ？」

「法廷ではそうじゃな。じゃが、なにしろ不利な証言は多いので、心証は決定的に悪いのう」

「だからどうしたというのよ！無罪は無罪、逃げも隠れもする必要はないわ！」

「ふん、あんたはまだまだ子供じゃな」
事務総長は反論してくるユキを余裕で受け流す
「・・・じゃがな、大人はそういうわけにもいかんのじゃよ。駄々っ子のような民間人の子供を甘やかして、自分を見失うようではいかん。わかるかな？パープルくんとやら」

「・・・」

ここでしばらく黙っていたパープル警視正がようやく口を開いた

「なるほど・・・お話しは良くわかりました」

そしていきなりユキに向き直って宣言する

「・・・ユキ・シュライク・イッテラー18λJK、他星侵略罪の現行犯で逮捕します」

「え？」

こんどはユキが目を丸くする番だ

「ど、どういうこと？」

「いま言ったとおりです。あなたはこの地球を不法に侵略しました。ですからスンゲデッカ星警察のこのパープル警視正が法の名の下に身柄を拘束させていただきます」

「な、なに？なんなの？冤罪でしょ？証拠もないんでしょ？じゃあ、不当逮捕でしょ？」

慌てふためくユキを前に、パープル警視正の言葉はあくまでも冷たい

「先ほども申し上げましたが、『現行犯』です。あなたはわたしの目の前で侵略行為を行いました。証拠とかそういう問題ではありません」

「ちょっと何言ってるかわからないわ！そんなでっち上げで罪もない市民の身柄を拘束して良いとでも思ってるの？」

「でっち上げではありません。現に『ユキ・シュライク・イッテラー18λJKが、単独で、不法に地球を侵略した』というわたくしの証言を、サポートしてくださる地球人の目撃情報も数多くあります・・・よね？」

パープル警視正はちらりと横目で事務総長の乗ったヘリコプターを見る
事務総長は大きく肯いた
「もちろんじゃとも。『ユキ・シュライク・イッテラー18λJK が、単独で、不法に地球を侵略した』という目撃情報ならいくらでもあるぞ。100 個でも 1000 個でも取りまとめてすぐにスンゲデッカ星に送り届けてやろう」

「ありがとうございます」

パープル警視正は深々と頭を下げると、改めてユキの方に向き直った

「というわけでユキ・シュライク・イッテラー18λJK、あなたを現行犯逮捕します」

「・・・ふうん」

猛然と抗議していたユキが、急に静かになった

「お巡りさんがそういう理不尽なことをするなら、ボクにも考えがあるよ」

ぱちり
ユキが指を鳴らすと、次の瞬間、全裸だったユキはパワースーツとパワーブーツを装着した完全武装体になった

「お巡りさん、見たところ丸腰みたいだね」

「それが何か？」

ユキは不敵ににやりと笑う

「パワースーツとパワーブーツで戦闘力を増強させたボクを、逮捕できる？」

このやり取りを聞いていたエリック広報官が狼狽する
「パ、パープルさん・・・やばくないですか？」

「あら、どうしてですか？」

「ユキ・シュライク・イッテラー18λJK は反抗する気満々ですよ」
パープル警視正は少しも慌てない

「わたくしも警察官ですから、凶悪犯と対峙した経験はそこそこございます」

「でも、相手は体格もいいし、武装してますよ」

「ふふふ、ご心配なく。心得もないハイスクールの生徒くらい、武装程度ではハンディにもなりませんわ」

その言葉を待っていたかのように、
ユキが背後からパワーブーツでブーストのかかったスピードとパワーに任せて殴りかかってきた
ひらり
パープル警視正はその攻撃を余裕で躱すと、同じ流れで高くジャンプし身体を捻りながら一旋した右脚を狙い澄ました通りにパワースーツの弱点であるユキの後頸部に思い切り叩き込む
ずばあああああああああん

「！」

一発でユキの意識が飛び、その場にうつぶせに倒れこんだ
どおおおおおおおおおん
ピクリともしない
何事もなかったかのようにパープル警視正はぽんぽんと身体の埃を払う

「・・・確かにパワースーツの防御能は高いですが、後頸部を強く揺らせば外傷を与えられなくても内部で勝手に脳震盪を起こしてくれますので」

おとなしい顔をしてさらっと恐ろしいことをいう
さすがは治安維持のプロである
見上げる地球人たちが呆然としている中、パープル警視正は淡々と後始末にかかった

「ユキ・シュライク・イッテラー18λJK、あらためて他星侵略、および公務執行妨害の現行犯で逮捕します」

当の本人はもう聞いていない
その場で完全に失神状態である
そんなことはまるで気にせず、パープル警視正はユキ・シュライク・イッテラー18λJKの両手首に手錠をはめた
がちゃり

＊＊＊＊＊

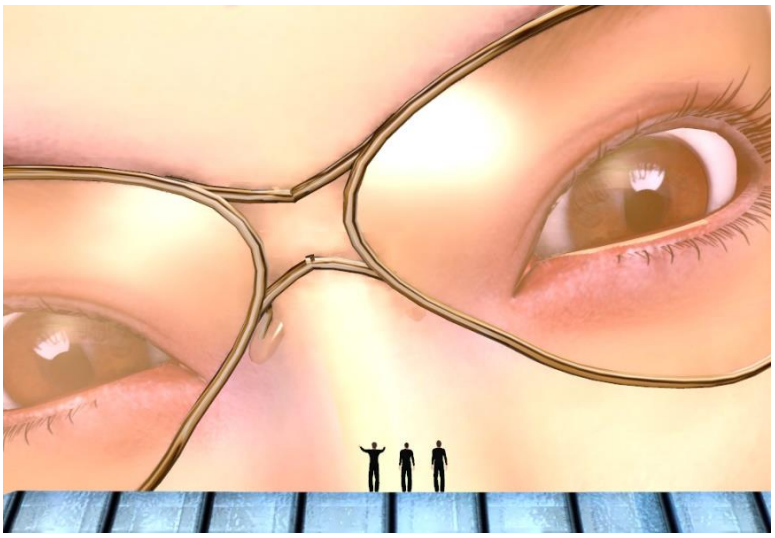
またしても地球は危機を乗り越えた
不法な侵略によって奪われた地球の主権はすみやかに犯罪者の手から地球人に戻された
犯罪者ユキ・シュライク・イッテラー18λJKはこれが再犯、しかも今回は他星侵略罪という重罪である
未成年とはいえ収監は避けられないだろう

この事件解決のお手柄ナンバーワンは、なんといってもまたまたスンゲデッカ星警察庁から出張してきてくれたパープル・マルサ・サンチアゴ 27ωOL 警視正である
そのパープル警視正、モニター越しに話をしている限りは華奢でキュートなおねえさんという印象だが、リアルで会ってみるとさすがにスンゲデッカ星人だけに身長 3000 メートルオーバーの超絶大巨人であり、地球上では立っているだけでも圧倒的な存在感である
ところがそれでいながらユキとは対照的に温和な性格＋控えめな物腰で誰に対してもきわめて礼儀正しく、かと思うとその気になれば豪快な蹴り技を得意とする格闘・捕物の達人、という二重にも三重にも予想を覆すキャラクターであった
地球を救ってもらった恩義だけでなく、この意表を突いた複雑なキャラが地球人たちに受けて好感度が急上昇、人気が爆発していた
地球防衛軍は勝利の凱旋行進と銘打って、街を跨いで仁王立ちするパープル警視正の股下を二列縦隊の戦闘機が飛行しながら潜り抜けるというパフォーマンスを行った
地表から見上げればパンツもろ見えのちょっと恥ずかしい大巨人アピールである
キャラとは違うのでパープル警視正にしてみれば内心迷惑だっただろうに、足元で大喜びしている地球人たちの様子を見たら嫌な顔一つできない
つくづく律儀な性格なのだ
そうこうしているうちに、パープル警視正はネオ・トキオのランドマークである超高層ビルの頂上で、見慣れた 3 人が手を振っていることに気がついた
事務総長、防衛長官、そしてエリック広報官である
パープル警視正はほとんど腹ばいになるような姿勢で超高層ビルの頂上に顔を近づけると、事務総長に向かって改めて深々とお辞儀した

「このたびの事務総長さまのお手並み、誠にお見事でございました。大変勉強になりました。危うく公務員たるものの基本を忘れるところであったわたくしをご教導いただきましたこと、一生忘れません。改めて御礼申し上げます」

いつの間にか呼び方が「事務総長さん」から「事務総長さま」にランクアップしている
それだけリスペクト感が爆上げになったということだろう
事務総長はここぞとばかりにふんぞり返る

「いやいやパープルくん、君はまだ若い。前途洋々じゃよ。これからも一層頑張りたまえ。」



「身に余るお言葉でございます。これを励みに、これからも精進して参ります」

パープル警視正はまたしても深々と事務総長にお辞儀する

「・・・それではわたくしたちはこれにて失礼いたします」

パープル警視正は恨めしげな表情のユキをスンゲデッカ星警察の巨大宇宙船の中に引っ立てていった
これにて一件落着
事務総長は晴れやかな笑みを浮かべながら、飛び去っていく宇宙船に向かって手を振っている
その傍らで、エリック広報官は未だにキツネにつままれた状態だ

「わかりません！全然わかりません！」
エリック広報官は単刀直入に詰め寄った
「どうしてあのミニスカ婦警さんはいきなり態度を豹変させてユキ・シュライク・イッテラー18λJK を逮捕したんですか？」
事務総長は涼しい顔である
「別にいいじゃろ。その方がわしらには都合がよかったし」
「いや、そういう問題では・・・」
「まあ、あのミニスカ婦警も、地球から他星侵略罪を告発するタレコミが大量に届いてはマズいからなあ」
エリック広報官は納得がいかない
「でも、はっきり言ってガセネタですよね。ゆっくり調べればわかること。彼女が有罪になる可能性はゼロでしょ？」
「そうじゃろうな」
事務総長は横目でエリック広報官を見下した
「とはいえ告発文が大量に届いたら、一応は捜査をしないわけにはいくまい。じゃが、何しろ物的証拠がない。有罪とは証明できんが、無罪の証明も難しい。もちろん最終的な判決は無罪で間違いないじゃろうが、スンゲデッカ星のあの硬直したお役所体質を考えれば、審理にやたら時間がかかることは間違いない。これだけ証言が多いのじゃから心証はめちゃくちゃ悪いしな」
「でも、無罪は無罪なんでしょ？」
ふふん、事務総長は鼻を鳴らした
「・・・パープル、といったかな、あのミニスカ婦警のねーちゃん。あの若さで警視正だそうじゃな」
「みたいですね」
「ばりばりのエリートじゃ。ああ見えて、野心のないはずがあるまい」
「・・・おっしゃる意味がわかりませんが？」
「この事件の審理が長引いたら、興味本位のマスコミが煽り立て始める。そのためにマスコミにも告発文を送る準備をしておいた。そうしたらどうなると思う？」
「？」

「お役所というものの本質はことなかれ主義じゃ。スンゲデッカ星警察庁も例外ではない。騒ぎが大きくならないようにあのミニスカ婦警を目立つポジションから外すじゃろう。処分ではないぞ。次の定期人事異動で、あくまでも普通の異動という体裁をとりながら、実質的な左遷じゃ」
「でも、最終的に無罪が証明されたら復帰できるんでしょ？」
「無理無理無理。公務員の人事じゃぞ。一度エリートコースから外れた者が一線に戻ってこられるはずがないわ。そもそも体裁の上では処分されたわけでもないのじゃからな」
「・・・」
「というわけで、可哀想だがあのミニスカ婦警のねーちゃんは、いくら最終的には無実が証明されても、これからずっとエリートコースとは無縁の地方ドサ回りをし続けることになる。下手すれば極限僻地の派出所勤務で一生を終えるかも知らんな」
「ひええ、エリートが一転、悲惨なキャリアになってしまうわけですね」
「それは困ると思ったから、この事件をさっさと幕引きしようと思ったわけじゃ」
「でも待ってくださいよ」
エリック広報官はまだ納得がいかない
「あの性悪娘を擁護する気はありませんが、でも、罪を犯したという証拠はないですよね。ましてやパープル警視正がその場に居合わせたわけでもない。現行犯逮捕って、明らかにおかしいじゃないですか。てか、ぶっちゃけ、でっちあげでしょ？警察が市民を守らないどころか、陥れても良いのですか？」
「市民？」
事務総長はエリック報道官をじろりと睨む
「一緒くたにするな。世の中には二種類の市民がいる。」
「二種類？」
「そう、公務員と、民間人じゃ」
「！」
「あのユキとやらの性悪女は地球人をまるで人間扱いしておらんかったな。同様じゃ。公務員もただの民間人を人間としてなど見てはおらん。ましてや、そのくだらない民間人を守るために、自分のキャリアを危険にさらすなぞ、あってはならないことじゃ」
「そ、そんな・・・」
「民間人を逮捕するなど心証だけで十分。もちろん時には失敗もあるが、些細な問題じゃ。ワシも今まで何回もやばい事件のもみ消しに付き合ってやったことがある。まあ、明るみに出ることは滅多にないがな、かっかっか」
「・・・」
エリック広報官は呆然として黙りこくった
代わって、それまで沈黙していた長官が問いかけた
「・・・事務総長は、パープル警視正の言動をそこまで正確に見通した上で、今回の仕掛けをなさった、と」
「当たり前じゃ」
事務総長はどや顔で肯く
「あのミニスカ婦警のねーちゃんは馬鹿ではない。だからわしがちょっとヒントを出してやればすぐに公務員のあるべき姿を思い出すはず、と思ったのじゃ」
「公務員の、あるべき姿？」
「そうじゃ。わしは公務員歴 50 年以上のたたき上げじゃぞ。全宇宙に普遍的な公務員の行動規範は知り尽くしておる。一方、ミニスカ婦警のねーちゃんは経験が浅い。だから愚かにも『民間人も公平に法で保護する』なんて初歩的なミスを犯してしまったわけじゃ。下手すれば『民間人の権利を守るために自らの出世を諦める』などという公務員の風上にも置けない愚行に走るところじゃったのじゃぞ。ワシの指導でその誤りに気づいたわけじゃから、そりゃ感謝もするじゃろうな、かっかっか、かーっかっかっかっか・・・それではわしは公務に戻るぞ」
事務総長は高笑いしながらその場を去って行った
唖然としてその後ろ姿を見送りながら、エリック広報官はまだしきりに首を捻っている
「・・・まだ納得いかないか？」

「いくわけないじゃないですか！」
憤懣やるかたないエリック広報官は、今度は長官に噛みつく
「僕だって公務員の端くれですよ！公務員とは公僕、すなわち公の僕のはずじゃないんですか？」
「俺にもわからないが、50年以上のたたき上げになるとそれが初歩的な過ちだと理解できるらしいぞ」
「そもそもですよ！あのおっさんが一人で軽はずみにこんなインチキ契約を結んでしまったのがケチのつき始めでしょ？役人らしく時間をかけて契約書を熟読し、まずいところをあぶり出して、おかしげな条項を削除するよう締結前にしっかり交渉しておけば・・・」
「時間がかかりすぎて地球はあの巨大戦闘ロボット軍団にぼこぼこにされていただろうな」
「！」
「だがあの人が細かいところは一切気にせず速攻で契約を締結し、すなわち巧みにユキ・シュライク・イッテラー18λJKを引きずり出してくれたからこそ、地球は最低限の被害で済んだともいえる」
「で、ですが、その後にあの超巨大性悪娘に良いようにされちゃったじゃないですか！」
「それにしたってあのまま戦闘ロボットに蹂躙されていたより人的被害はよほど少なかっただろう。今回に限れば、ユキ・シュライク・イッテラー18λJKはほとんど地球人を殺していないんだからな」
「でも・・・」
「更にその状況を一人でひっくり返してチャラにしてみせたのもあの人だ。最終的に、地球はきわめてローコストで、ほとんど地球人の命を失うことなく、まんまと侵略者の撃退に成功したのだ」
「！」
「つまり、地球は、最初から、最後まで、全部あの人の個人プレーによって救われたのだよ」
言われてみればその通りである
パープル警視正に花を持たせたように見えて、実はその裏で事務総長が全てを決めていた
「つまり・・・全ては事務総長の筋書き通り、と」
「うーん、そこに筋書きがあったのかどうかは・・・正直疑問だけどな」
それはわりとどうでも良い問題なのかもしれない
人の実力とは、意図とか途中経過など関係なく、最終的に何を成せるかだ
そういう意味で、事務総長が凄い実力者であったことは間違いない
この人が味方にいてくれて良かった
改めて思い知らされる二人であった

ノモイの逆襲・終